教科研究における保育の授業の展開（一）

磯部景子

はじめに

これから、教科研究において保育の講義をどのように展開してきたか、また、講義をすすめていく間に考えさせられたことについて述べてまいります。

私が所属している大学は、教育学部だけの単科大学です。教育学部では、教科研究は卒業するために必要な科目となっています。

教科研究は国語科研究、社会科研究、算数科研究、理科研究、音楽科研究、図画工作科研究、体育科研究、家庭科研究の八教科にわたっています。大学を卒業するために、さきに述べた八教科から五教科を選択し、履習することになっていますので、学生はどの五つの教科を選ぶかというところでは、選択の余地がありますが、教科研究を履習しなければ卒業できないということは、教育学部の特徴のひとつとしてあげられます。

大学には次の教室があります。国語、東洋学、法経社、教育学、心理学、職業指導、特殊教育、幼児教育、数学、物理学、化学、生物学、地学、音楽、体育、家政学、技術、の教室です。

私は家政学教室に所属していて、教科研究では家庭科研究を担当しております。

教科研究は一教科について、一年間にわたって履習するのですが、家政学教室では、一年間をふたりで分担していますので、これから述べる授業の展開は半年にわたるものです。私の場合、家庭科研究を四クラス受け持っていますが、学生はそれぞれ教室別にどの時間の教科研究を受講するかを指定されていますので、時間ごとに、それぞれ専攻のちがう人といっしょに子どもについて考えることになります。

学年は主として三年生ですが、一部四年生もいます。一クラスは大体六〇名～八〇名です。どのクラスも女子学生の人数が多く、男子学生はクラスの人数の二五％～三〇％くらいです。大学全体では女子学生の人数が半数を少しこえていますが、家庭科研究では、女子学生の方がかなり多く選択しています。

教科研究を半年間すすめていくことは、はじめて経験した時

も、五年たった今でも、何かととまどうことばかりです。

大学で、子どもたちのいないところで、大学生といっしょに子どもについて、考えたり学んだりするには、〃何からはじめればいいのか〃〃何をすればいいのか〃と、いつも考えさせられています。

はじめの三年間は、まず、子どもたちの記録をとることからはじめていました。記録については別の機会に述べますが、それぞれの子どもの記録には、記録を書いたあとに、記録をとって〃子どもについて感じたこと〃を書いてもらいました。

集まった子どもの記録を読むと、ひとつずつとてもおもしろいのですが、記録を読みおわり、〃子どもについて感じたこと〃のところまでくると、大きな壁にぶつかってしまいました。子どもについて感じることのところに、〃子どもは少しもじっとしていなくて、おちつきがない〃〃わがままである〃〃自己中心的である〃と書いてあるのです。それもあまりにも大勢の人が書いているのです。書いてある記録がおもしろいだけに、おちつきがない、わがまま、自己中心的、ということばにぶつかるたびに、〃子どもの記録に興味がもてるにはどうしたらよいのか〃〃記録が読めるということはどういうことなのか〃と考えさせられました。

だれでも、子どもの記録を何回かとり、読んでいるうちに、いつのまにか興味をもって記録を読めるようになるということはいえるのですが、そして、それは今後、それぞれの人が子どもたちといっしょに生活する中で、大いに楽しんでもらいたいところですが、できることなら第一回の記録をとるときから、子どもに興味を持ってほしいと願うのです。

そこで、子どもの記録をとることは、子どもについて何らかの関心がもてるようになって、それからはじめることにしました。

では次に、最近試みるようになった授業の展開をできるだけありのままに述べることにします。

子どもの世界

子どもはどのような世界にすんでいるのでしょうか。子どもは何をどのように感じ、何をどのように考えているのでしょうか。

最近では、「子どもの世界」ということから授業をはじめることにしました。

私たちは知らない間に、自分では気がつかないままに、子どもに対して責任を感じて、何かをしようと思っているものですが、できるだけ自分を自由な状態にして、〃子どもはどんな世界にすんでいるのかな〃とか〃子どもは何をどのように感じているのか

な〃と思いめぐらしてみることは大切なことでしょう。

そこで、まず、しばらくの間、〃おとなとして、あるいは先生として、子どもたちに何をしなければならないか〃とか、〃おとなとしての責任は何か〃といったことがらを頭からとり去ることにします。

授業時間に小さな紙を配って、その紙に、「〃子どもはどんな世界にすんでいますか？〃ということばをきいて、思いうかぶことを書いて下さい」といい、一〇分くらいの時間でおもいうかんだことを書いてもらいます。そして、次の週に、それを読みあげます。

学生はひとり、ひとり、それぞれ子どもに関しての経験がちがい、また、思いうかぶこともそれぞれちがっています。

〃小さな弟や妹がいて、あるいは姪や甥がいて、いっしょにくらしている人〃〃近所に知っている子どもがいて、その子どもが遊びに来るとかあるいは、親戚に子どもがいて、時々子どもに接する機会のある人〃〃子どもに興味を持っている人〃〃子どもに接する機会のない人〃〃子どもにほとんど関心のない人〃などさまざまです。

子どものすんでいる世界ということばをきいて思いうかぶことがらも、〃目の前で子どもをみているように、子どものうごきをありのままに書いたもの〃〃子どもへのあこがれを書いたもの〃〃子ども時代をなつかしむもの〃〃自分自身の子ども時代をふりかえって書いたもの〃〃子どもの世界ということばから思いうかんだことばを書いたもの〃〃子どもは、まわりの世界をどのように感じているかについて書いたもの〃〃子どもの世界はきっとこのようなものだろうと思いめぐらして書いたもの〃〃子どものいる情景を物語り風に書いたもの〃あるいは〃子どもの世界をまるでわからないものとして、又はまるで忘れてしまったもの〃として書いたものなどいろいろです。

では、〃子どもはどんな世界にすんでいますか〃について、書いたものをいくつか紹介いたします。

○

子どもの世界の水平線は低いところにある。彼らは体が小さいので、せまいところへも入りこめるし、地面にしゃがんでいても、腰がいたくならない。小さなみみず一匹のあとを追っかけて、空想する。空箱や空罐が城になる。（美術　M・I）

○

子どもは、水がとってもすきで、洋服がよごれるとか、水にぬれてかぜをひくなんて考えないで、すきな時に、あきるまで水とたわむれていたがる。

いつも、お母さんのしつける外側にいて、石をけずってみたり、蟻の巣を見つけるのに土の上をはいまわったりする。

お昼寝は実は少しも好きではなく、おとなが寝ている間に、手をべたべたにしながら、しゃぼん玉をつくって、ひとりで楽しんでいる。

（教育　M・Y）

○

●おもしろいものに、素直に反応する。

●テレビ、まんが、絵本などを見て喜び、真似る。

●体を動かさずにはいられなくて、外へ出て遊ぶのが好きである。

●先生は特別なものとしてみている。

●めずらしい人がくると、すり寄って来たり、または、はずかしがって、逃げたりする。

●小さい子どもは、おんぶをしてもらうのが好きである。

●すぐ泣き、すぐもどる。

（幼児教育　M・M）

○

お父さんとお母さんと兄弟といっしょにくらす。友だちと遊び、服や手をよごして帰る。お父さんやお母さんに今日あったことを話す。今日のおやつは何かと心をわくわくさせる。お父さんの帰りを待つ。

（音楽　S・W）

○

「母親とか家庭に命綱を結びつけて広い宇宙を遊泳し、さまざまなできごとにいちいち驚いている」といった感じを子どもたちからうける。おとなには子どもの知っている世界は限られているように思われるが、未知のものが多く、体も小さい子どもたちにとって、その小さい世界も限りなく大きなものであろうと思う。

（心理学　S・A）

○

五歳になる姪やその友人の会話などを聞いていると、その世界は決して美化されるようなものではないと思う。しかし、彼女らの自己主張や協調性などをみると、素直な面も多い。子どもは理由と結論が、すぐ一対一の関係で結びついていて、私にとってそれは驚きでもあるし、好奇心もそそられる。子どもの世界は私たちの考える美しさばかりの世界ではない。写実的な色彩の強い世界だと思う。

（音楽　H・A）

○

子どもたちは見るもの、見るものに興味を示す。ほんのささいな変化さえも、目を見張る。子どもにとっては、ものめずらしいものばかりの中に自分がいるように感じるのではないだろうか。

（国語　T・F）

○

生まれて育った自分の家が、子どもにとってはひとつの国。

一歩外に出てみると、そこはまるで外国へでも来たように、見るもの、聞くものがめずらしい。

自然が大好きで、動いているもの、石っころのようにじっとして動かないものにも愛着をもっている。（不明）

○

子どもが手にするものは、おとなのものも多いので、子どもはまわりの世界を巨人の国のように思っている。（不明）

○

悲しいことはできる限り少なく、あらゆるものがハッピーエンドであって欲しいと思うのは、おとな以上に強いようである。花でも洋服でも、何でも色があざやかで、明るいものが好きである。ひとのものの方が、みんな良く見えてしまう。（国語　M・I）

○

どんなところへも自分の気持ちを動かすことができるゴム風船のような世界。そして自分のまわりのほんの小さな世界しか見ることができないにもかかわらず、その世界の中でおきたどんな小さなことも見逃がすことがない。（音楽　S・S）

○

夢の中。砂場の台所。木でつくった階段。何々ごっこ。親分子分。物まねの世界。母親の買物かごの後。父親のひざの上。となりのSちゃんの秘密の場所。がんがんの秘密基地。紙飛行機。自由な世界（月へ汽車で行ける世界）。死んだ人が寝ているようにみえる世界。（美術　Y・O）

○

ふわふわときもちのいい世界。おとなたちと見る高さが違う。同じ机でも下から見る。なんでもかんでも自分のものだと思う。明るく楽しい世界。悩みなんてない世界。母親、父親、先生、友だちと善意の中の世界。（不明）

○

おかあさん。おとうさん。自分の住んでいる家。おもちゃ箱。おかあさんの声・顔。自分の家のまわりの家や道。虫たち。（音楽　K・S）

○

夢と現実の間の世界。すべて純粋な世界。やわらかいしゃぼん玉の世界。とまどいだらけの世界。空と地の中間を駆ける世界。うそが多いのにそれがちっともうそでない。歩いてアメリカへ行けて、眠っている間に北極星まで到着することができる。大きいのが太陽で、小さいのがお星さま。（国語　A・H）

●どろんこの世界。

●石ころや空きびんやタイルなどが、宝物である世界。

●ミルクとチョコレートとキャンディの世界。

●母親のスカートのまわりの世界。

○

夢の中。童話の世界。幻想。母の中。理想の世界。シャボン玉の中。白い馬。おもちゃ箱。海。お話。ミルク。まだ行ったことのない道。花のいっぱいある世界。いくつも行方の分れた道の分岐点。愛。神聖。わたがし。神様。エンゼル。（美術　F・Y）

○

童話の世界。砂場の山の上。おかあさんのひざの上。おとうさんの腕の中。空に浮かんだ雲の上。机の下の影にうつった板の上。海の渦からとびちる〝あわ〟に似た世界。風にひらひら舞う花びらの行き交うような空間。（H・T）

○

汗とどろんこにまみれた世界。ほこりの中を歩いている。風船につかまると飛べると本気で思っている。動物も人間だと思いこんでいる。おとながおもっているよりずるがしこい社会。動くものには何でも触れる。虫、花、犬、猫、おもちゃ、雲、青空、棒のついたあめ。（美術　H・I）

○

●富に対する偏見のない世界。

●自分と同じ者ばかりの構成。

●「みえ」のある世界。

●おもしろい遊びを発見する子どもがリーダーとなる世界。

●おとなにはわからない世界。

●子どもだけの秘密の世界。（法経社　S・M）

○

空想の世界。遊びの世界。自分がみて感じたものの世界。自分に対していっしょうけんめいしゃべっている世界。聞いたことがそのままみたようにおもう世界。みたものがそのまま自分にあてはまると考える世界。夢でみた世界が、実際の世界かわからない世界。いっしょうけんめい動きまわっている世界。（技術　M・T）

（つづく）

（愛知教育大学）